

「高厚院様御道の記」

(翻刻) 東京・桂の会(会員十四名)

むかしの人のいひをけるひきめきてまねふやうなるは かつはらいとふ侍ると 旅のつれ／＼いと、わひしければ筆にまかせてかきつゝ侍る 明日たゝむとし侍るに 人々あつまり来給てとし月のなこりおしみ 別むことをいひかはしければほとなふ月も夕つかた庭を詠て

いろあらはさそな余彼をしたはましなれてほとふる木々のこすへを

卯月廿日あまりの八日のひなむかとてす 知しらぬをくりつゝ来ましてなこりをしむ事はむかたなし のり物にもいふへき事あれと知しらぬおほく立へたてたれはかひなし 其夜はちりふといふ所にとまりぬ たひのくるしきにうちそへ 人をとかむる大のこゑ鳥の音にもよほされ あきならねとも寝覚かちにて

旅衣寝覚わひしき床になを人をとかむるさとのいぬかな

たひ衣わかれをおもふ袖にまた聞しににたる鳥のこゑかな

廿九日御由といふ所にとまりぬ よし田といふ所をゆくに古さにては我がさりしほとゝきすのおほくなきにければ 初音たにまた余所なりしほとゝきすしはなくこゑを聞くらすかな

晦日あらいといふ所にとまりぬ あけぬれは渡し守といふなるものともあつまり居て とかくいふもいとめづらかなり ほとなく舟つきてあかりゆくに 旅人のおのこたゝ一人かたはらをゆき立かへりゆくよとやらやましく過行かたのといひしも今更のやうにおほえ侍る おりしも友なるわらはへともいふをきけは しりたりし人のもとつかひしものとなむいふに いと古さとのこひしさやらむかたなふ行に はま松といふ所をゆくに むかし見しにかはらぬ松のすかたよと 人のいふを聞にも過し年なくなりし人のあらましかはとおもひ出て

浜松のかはらぬ色を見てもなをわすれすこふる袖のうへかな

是よりてんりうのわたりとかいひて舟に乗侍る 海川をへたつることはやいくつにか成ぬらん はる／＼来にけるよとおもふに彼ありはらなる人のいひしも更に思ひ出られてこゝろほそし

とにかくにうきよをわたりわさなれやはや瀬のふねの
水のまに／＼

朔日あらよりみつけといふ所にとまりぬ

いにしへはたれかみつけといひそめしたひねのとは
ゆめもむすはす

さよの中山をこゆるにもいのちなりけり といひをきしむ
かしのことの葉いひ出て 過し人のまたこへさるもあはれ
におほえて

旅ころも夢もむすはすさよの山またこへさりし人をこ

ふとて

なき人にあふとたにおもふ物ならばかゝるたひねもも
のうからまし

かくはる／＼とゆくたひのさひしきなかにも年月あひ見て
やと ねんし思ひし人々にたいめたまはんことのみそ心な
くさみにはしける 二日見つけよりかなやにとまりぬ 大
井川と言をわたるにも 聞しよりもわひしさいやまさりに
けり 三日かなやよりおかへにとまりぬ うつの山こゆる
に夢にも人になといひし事おもひ出ていと心ほそし

あつま路は夢かうつ、かうつの山うつ、にこゆるつた
のほそみち

まりこ川わたるに聞しにも似す覚えて

あり／＼とたかいひおきてまりこ川暮あくるほとも水

神代よりつもりしちりのゆくえにも名たかきふしの山
と成らん

十二日おほ磯よりかな川にとまりぬ こよひははしめてさ
月の月を見侍りぬる

くまもなくはれ行そらの月を見てたひのかりねもわす
られそする

明ぬれはけふはむさしに入ぬると人々の云うに たひのつ
らさもわすられてめつらかなるやうにおほし侍る

君か代をやまと言葉にいわいつ、かきりもあらしひさ
かたの空

寛永十年西四月廿八日

高原院殿江府え御発駕御道の記

所蔵「名古屋市蓬左文庫」

はなかりき

四日おかへよりゑしりにとまりぬ 清見寺近きといふに見
す打すきん事口をしくて たちより聞しよりもや、立まさ
る庭のまつも心ある故もやとおもひはんへる

きよみてら見すはくやくしく思ふまし聞しにまさる梅の
たちを

それよりもおきつ河をわたる

おもひきやよそに聞こしおきつ川ふしの山さへ見すな
りぬ

古郷はいやとをさかりにとをさかる□七日かんはらより三
嶋にとまりぬ 八日雨にさへられておなし所にとまりぬ
ほと、きすの軒ちかくなきければ

晴くもる空をみしまの夕くれにおりしりかほのほと、

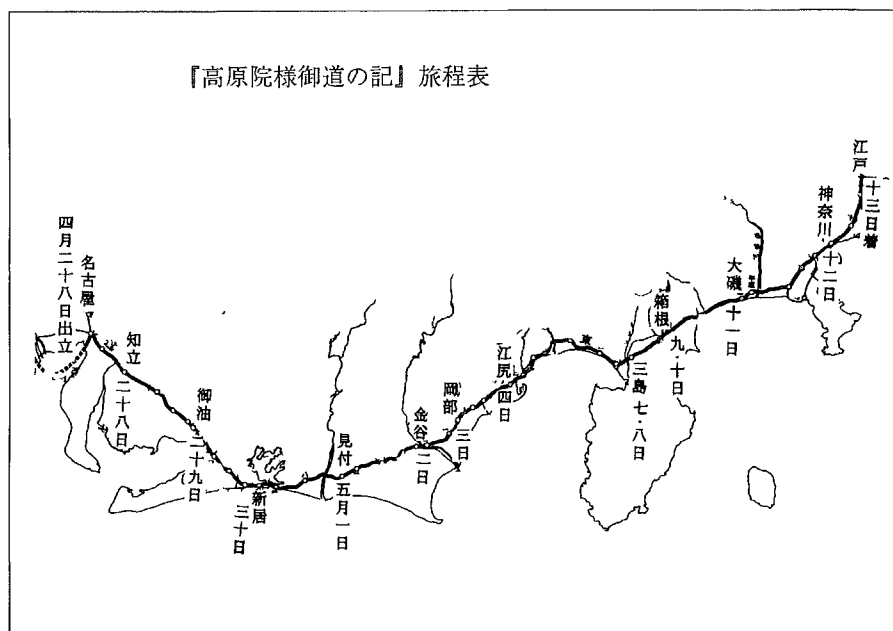
きすかな

九日三嶋より箱根にとまりぬ 十日雨やますふりければな
をおなし所になんとまりはべる つれ／＼やなくさむとわ
れも人もふるさとへいさふみやらん など、いひてかくつ
るてに手習なとしてかたはらに

思ひあまりふる里人にいひやらむおなし雲井のそらや
見ゆると

十一日箱根よりおほいそと云所にとまり侍る そらはれて
けふそふしの山をさたかに見侍る

『高原院様御道の記』旅程表



「高原院様御道の記」について

大井 多津子

「東京桂の会」では 主宰者柴桂子の蒐集した旅日記のなかから「高原院様御道の記」(逢左文庫所蔵)を翻刻した。高原院様とは尾州名古屋藩初代藩主徳川義直(家康の九男)の正室春姫である。また安芸御前とも称された。この「御道の記」は寛永十年(一六三三)四月春姫三十二歳の時、世子光友、鶴姫と共に江戸屋敷に移った時の道中記である。四月二十八日に名古屋を立ち、五月十三日に江戸に着く。この十六日間の江戸までの道中記が「高原院様御道の記」或は「高原院殿尾府御発駕御道之記」である。

寛永元年(一六二四)十一月、島津薩摩守家久は土井大炊頭利勝に諸大名の妻子は江戸におくように進言し、他にさきがけて妻子を江戸邸にいられた。しかし古くは慶長五年(一六〇〇)に前田利長が生母お松の方を人質として江戸に送り、慶長九年(一六〇四)に肥後國人吉藩主相良長母が母を、慶長十三年(一六〇八)に藤堂高虎は家臣四人の子供を人質として江戸に送っている。寛永十一年(一六三四)八月には譜代大名妻子の江戸居住が定められた。翌寛

永十二年(一六三五)六月武家諸法度を改定し、諸大名の参勤交代を制度化した。これら一連のことにより春姫達も江戸屋敷に移ったのであろう。

春姫は慶長七年(一六〇二)紀州和歌山藩主浅野紀伊守幸長の二女として、紀伊和歌山で生まれた。母は美濃大垣藩主池田信輝入道勝入の女である。慶長十四年(一六〇九)義直との婚約が成立する。義直十歳、春姫八歳の時である。春姫は慶長二十年(元和元)(一六一五)四月十二日、名古屋城の本丸に入興した。十四歳だった。その時の和歌が一首残されている。

高原院殿御婚札の節紀州和歌山御出興の砌御暇乞被為遊終にゆく道より猶もかなしきはいきてのうちのわかれなりけり

義直の性格は謹厳、剛直、寛容。学問とくに儒学心に心を寄せ、家康より贈られた「駿河御讓本」を中心に、多くの漢籍を集め文庫に保存し、蔵書家としても知られ、音楽を好む一面もあった。和歌を詠み、よく琴を弾いた春姫とは仲睦まじかったと推察されるが、子がなかった。

元和九年(一六二三)義直二十四歳、春姫二十二歳の時、老中土井大炊頭利勝が公命をもつて側室を置くことを勧めたが義直は固辞した。しかし、利勝は強いて諫言し、また後水尾天皇の中宮東福門院の内々の取り持ちもあり、翌寛

永元年(一六二四)側室おさいの方を迎えた。寛永二年(一六二五)義直の長子光友(二代目)翌三年(一六二六)鶴姫が、共に名古屋で生まれた。この時期の和歌が残っていれば、心境などもれ何うことができるのであるが、残念ながら残されていない。春姫こと安芸御前は寛永十四年(一六三七)四月二十三日江戸邸にて逝去する。享年三十六歳で、江戸に在住したのはわずかに四年であった。貞淑な夫人だったとのことである。遺骸は木曾路を経て名古屋に送り満松寺に葬られた。法号高原院大嶽宗椿。

「むかしの人のいひをける……旅のつれ／＼いと、わひしければ筆にまかせて……」という文で始まる『御道の記』は、名古屋から江戸まで十八首の和歌を含む十六日間の旅日記である。二日ほど記述がもれているが、他は通過する宿の駅名が書かれている。名古屋からの旅程は次の通りである。

四月
二十八日 知立 泊 宮から知立まで四里十八丁(約十八キロ)
二十九日 御油 泊 知立から八里七丁(約三十二キロ)
晦日 新居 泊 御油から七里十一丁(約二十九キロ)
五月
朔日 見附 泊 舞坂から七里(約二十八キロ)

二日 金谷 泊 見付から七里十五丁(約二十九キロ)
三日 岡部 泊 金谷から四里三十四丁(約二十キロ)
四日 江尻 泊 岡部から六里五丁(約二十四キロ)
五日 欠
六日 欠 蒲原泊カ
七・八日 三島 泊 江尻から十三里十四丁(約五十三キロ)
九・十日 箱根 泊 三島から三里二十八丁(約九キロ)
十一日 大磯 泊 箱根から八里八丁(約三十三キロ)
十二日 神奈川泊 大磯から九里二十七丁(約三十九キロ)
十三日 江戸屋敷入 神奈川から品川まで五里(約二十キロ)
名古屋から藩邸までの行程はおよそ三百五十キロの旅である。今切、天龍川等の渡しもつつがなく越えた時には、伊勢物語の歌「から衣きつ、なれにしつましあればはる／＼きぬる旅をしそ思ふ」を、また小夜の中山では西行の「年たけてまたこゆるべし思ひきや命なりけりさよの中山」などを思い出して、十六日間の旅は無事に終わり、江戸屋敷へ入っている。

次に高原院殿御詠十三首と追悼御詠一首を付記する。ただ追悼御詠はいつ誰のことを詠んだのかは不明である。

高原院殿御詠

心

心にはここにぬまゝ心によ心にぬかはこゝろにぬなり
 おしからぬこの身なからもかきりとてたきつきなんこと
 そかなしき
 た木々こるおもひはけふをはしめてこの世にねかふのり
 そはるけき
 たえぬへきみのりなからそたのまるゝよにとむすふなか
 のちきりを
 むすひおくちきりはたえし大かたののこりすくなきみのり
 なりとも
 おくと見るほとそはかなきともすれは風にみたるはきの
 うは露
 やくとせはきえをあらそふつゆの世におくれさきたつ程へ
 すも哉
 秋風にしはしとまらぬ露の世を誰かくさはのうへとのみ見ん
 いにしへの秋の夕へのこひしきに今はと見えしあけくれの夢
 いにしへの秋さへ今のこゝろしてぬれに袖に露そおきそふ
 つゆけさはむかし今とおもはへす大かた秋の世こそつら
 けれ
 かれはつる野へをうしとはなき人の秋にこゝろをとめさ
 りけん

のほりにしくもひなからもかへり見よ我あきはてぬ常なら
 ぬ世に

仄聞

高原院殿御婚礼の節 紀州和歌山御出興の砌御暇乞被
 為遊

終にゆく道より猶もかなしきはいきてのうちのわかれなり
 けり

追悼御詠

つねよりも庭の紅葉のこかるはなみたの雨のそむるなる
 らむ

参考文献

- (1)『国書総目録』岩波書店 一九六三年
- (2)『国史大系』徳川実紀第二編 一九九一年
- (3)名古屋市史人物編 名古屋市役所編纂 一九三四年
- (4)『女流著作解題』女子学習院 一九三九年
- (5)今井金吾著『今昔東海道独案内』 一九九一年
- (6)柴桂子著『近世おんな旅日記』 一九九七年

千一七五—〇〇九二

東京都板橋区赤塚三二二八—三
 TEL・FAX 〇三—三九三八—二七八九